

奨励賞の「左側は崖」は、綾辻行人氏の本格ミステリ「館」シリーズをちょっと思わせる、という褒め過ぎになってしまいそうですが、おもしろく読めた作品でした。

毎年、夏になると怪しげな場所で合宿をすることが恒例になっているオカルト研究会。怖がって参加しなかったひとりのをぞき、四人のメンバーはQ屋敷に向かいます。はたして彼らがそこで出会ってしまったものとは。そして起こってしまった事態とは……。

登場人物たちの行動の動機にかなり無理があったり、舞台背景である屋敷の設定が少々大雑把であったり、終盤は展開を急ぎすぎたりと、欠点はいろいろあるのですが、作者がつくって切り離れたジグソーパズルを、ひとつひとつ嵌め込みながら読み進めていく楽しさを味わわせてくれる小説でした。

「風邪薬で半日目を覚まさない土井垣」などの伏線や、「時間のずらし」の運びなど、随所に工夫がほどこされていますし、ミステリードラマ「あなたの番です」からの連想であろう神谷の口癖「私の番よ」の、ラストでの使い方もしゃれています。また、登場人物の名「東構(ひがしがまえ)」を使ったシャレが出てくるシーンでは、思わず吹き出してしまいました。小説を書くよろこびを知っている、遊び心のある作者だなと思いました。その個性を存分に生かして、またぜひ新たな作品に取り組んでみてください。

同じく奨励賞の「ペルセウスの約束」の主人公の口癖は、「今日は最悪な日だ」です。

名門女子中学に合格し、バラ色の中学生生活が待っているかと思いきや、現状はといえば、コロナ禍でのリモート授業、山のような宿題と、ストレスフルな日々。中一の「私」のリアルな悩みが綴られていきます。

そんな「私」の唯一の楽しみは、中学が別になってしまった、幼なじみの親友とのやりとりだったのですが、あることをきっかけに、二人は疎遠になってしまいます。やがて夏休みが近づき、「私」は思い出すのでした。かつて親友と交わした、ひとつの約束を……。

親友の表記を「あの子」としてあるのは一時期の距離感をあらわすためなのかもしれませんが、報告的な印象の文になってしまっているのが少し残念。設定を考えれば「名前」で記したほうが自然ですし、そのほうが作品と読者の距離感がもっと近くなると思います。

また、パトカーが出動する事件とは、どういうものだったのか、もう少しふれておいたほうが話に現実感が出ます。リアリティあふれる前半に比べると、後半の展開とラストにはいささか物足りなさをおぼえました。しかし「私」と彼女がたがいを思い合う気持ちはじつに素直に描かれていて、そのむき出しの友情に心打たれました。

惜しくも入賞にはとどきませんでした。が、「鉄の赤んぼう」も心惹かれた作品でした。マッドサイエンティストが機械生命体をつくるというのはよくある物語ではありますが、「命」の定義を考えさせてくれるとともに、そのせつなさ、はかなさを感じさせてくれる SF。小道具の使い方やラストの着地のさせ方などに、センスのよさが光っていました。

今回、それぞれが異なるきらめきを持つ、力作揃いでした。どうかこれからも大いに磨きをかけて、自身とその作品を、より輝かせてください。